

はじめにーレッドデータブックの意義と役割ー

高須英樹

和歌山県は本州最南端に位置し、日本最大の半島である紀伊半島南西部の大部分を占める。黒潮の影響とも関わって温暖な気候であり、時には大きな災害を引き起こす、温帯域としては世界的にもまれな降水量によって、豊かな自然が成立している。その特徴は、分布北限の生物種が多く存在するだけでなく、半島という地理的な特性とも関わって多くの固有種が分化していることにある。一方で、森林の66%がスギおよびヒノキの人工林で占められており、古くからヒトの手による自然の改変が進められてきた地でもある。

和歌山県版レッドデータブックは、2001年に「保全上重要な和歌山の自然ー和歌山県レッドデータブックー」として出版され、2012年には改訂版も編纂された。また、2016年に「生物多様性と和歌山戦略」が策定されたことを受けて、同年「生物多様性と和歌山戦略推進調査会」（以下、推進調査会と略記）が設置された。この推進調査会には10の専門部会が設けられ、以前のレッドデータブックでは取り上げられてこなかった分類群の専門家も参加することになった。このことによって、今回の改訂では「菌類」や「その他無脊椎動物」が新たに上げられただけでなく、海岸・浅海域の生物にまでその範囲を広げて選定を行うことができた。

しかし、取り上げられた希少種の具体的な保護・保全に役立つ、数量的な基準に基づいた評価はほとんど行うことができなかった。また、希少であることが明らかでありながらも、DD（情報不足）として絶滅の危険度を評価できなかった生物種もかなり多い。今回選定された生物は1,655種類に及び、前回、前々回と比較して大幅な増加となった。これは上述のように、扱う分類群が増加したことによる面も大きく単純な比較はできないが、従来取り上げてきた分類群に限ってみても、全て増加が認められるだけでなく、「絶滅危惧Ⅰ類」に位置づけられた種数も大幅に増加している。

人類は生態系から様々な恩恵を受けて存在しているが、これは「生態系サービス」として認識されている。生態系を構成する多種多様な生物の絶滅は、直接的・間接的にこの「生態系サービス」の低下を招くものであり、人類にとって極めて大きな損失である。一方で、前回の改訂版でも指摘したように、レッドデータブックに記載されていないという理由から無視されたり、極端な場合には「記載されていないので保護・保全の必要がない」というようなレッドデータブックの情報の意味を履き違えたりする憂慮すべき事態が相変わらず認められる。しかし、「生物多様性」は多くの普通種に支えられて、希少種が存在しているのだということを忘れてはならない。

このたび改訂された本県のレッドデータブックが、様々な環境教育の教材として、また、野生動植物の保護・保全に係る条例等の制定や、官、民および事業の大小を問わず、環境の改変に関わる全ての営為の立案に際して、広汎に活用されることを望みます。

最後に、推進調査会委員各位および選定・執筆にご協力いただいた、多くの研究者の皆様に深甚の謝意を表します。